

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 5 月 27 日現在

機関番号：12501

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2012～2013

課題番号：24653177

研究課題名(和文) 創発信頼型学級経営を目指す教師のためのトレーニング方法の開発

研究課題名(英文) Development of training methods for teachers aimed at emergent trust type class management

研究代表者

蘭 千寿 (Araragi, Chitoshi)

千葉大学・教育学部・教授

研究者番号：90127960

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,000,000円、(間接経費) 300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、オートポイエーシス理論に注目し、近年の「生きる力」を育む人間観に基づく子どもの自主自律の育成を支援する「創発信頼型学級」(蘭,1999,蘭・高橋,2008)づくりの開発を行った。教員や学生らの「創発学級」経験より、(1)教師の優れたリーダーシップに導かれる学級よりも、教師の支援を受け生徒相互が影響を及ぼしあうことで成立した創発学級の方が成熟した集団であった。(2)創発学級は、教師から生徒への主導権の移譲、生徒と教師、生徒間の関係性や信頼関係の再構築、教師の支援と生徒相互間の活動の認め合いによって、生徒の自主自立的な成長を促す一つのスタイルであると提案される。

研究成果の概要(英文)：From the viewpoint of autopoiesis theory, this study was carried out to develop to support the development of autonomy of the child based on the human sense to nurture the power to live in recent years of emergent trust class manufacturing. Of students of teacher training and in-service teachers from emergent class experience, the following results were found in this study. Than the class derived from the leadership towards the emergent class is an excellent teacher, it was a group that was mature. From three factors of each other recognized activities of students between transfer of leadership to the student from teacher, relationship and teachers students, between students, rebuilding of trust, support and teacher, Emergent class has been proposed to be one style to encourage growth autonomy of the student.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・教育心理学

キーワード：創発学級 アイデンティティのゆさぶり 多元的な価値 相互認証 教師の指導性

## 1. 研究開始当初の背景

従来の義務教育諸学校における学級集団指導は、安全面や生徒の健全な発達の指導という考え方から、教師による管理型指導が学級経営の基本となり、効率よく生徒の指導をおこなうための方策や統制するための方法論が議論されることが多かった(中野・小熊, 1993, 片岡, 1986 など)。しかし近年、グローバル化時代の知識基盤型社会に対応した文部科学省の教育政策の1つである「生きる力」を育むための自主性や自律性を重視する人間観が定着し、子どもの自主自律を育成するための学級経営が求められている(文部科学省諸答申, 1995, 2000)。しかし、現実的な対応として、発達段階を考慮した際の安全への配慮と子どもの自主性の尊重は並立することが難しいことは学校現場から多くの声が挙げられている。こうした実践の場の葛藤を解消しながら、生徒の自発的な活動を伸長する学級経営が求められている。

## 2. 研究の目的

研究代表者らは「ゆらぎによって集団が相互作用を繰り返す、成員の活動が次から次へと創発され、集団として新たな秩序相に移る」、ボトムアップ型の秩序形成、オートポイエーシス理論(マッラーナら, 1972; 河村, 1995)に注目し、自己創発的な人間性を育む支援を促す「創発学級」集団の観点を設定し、探索的検討を加えてきた(蘭, 1999, 蘭・高橋, 2008 など)。その研究成果を理論的基盤として、本研究は、教員や教員志望学生のために、生徒の自主的な学級集団参加を促す「創発学級」集団の育成支援のための、教師の学級経営力を高める自己研修プログラムの作成を目的とした。

## 3. 研究の方法

平成 24 年度は関連学術文献資料の講読、2 度にわたるアンケート調査、面接による学級づくりの事例収集による自己研修プログラムの作成を行う。創発学級集団の特徴をより明らかにし、その集団のプログラムづくりを進めるための質問紙作成をあわせて行う。平成 25 年度は創発学級の妥当性を検証しながら、その結果を受け最終的な学級経営力を高める自己研修プログラムの作成、提案をおこなう予定である。

## 4. 研究成果

### (1) 学級集団類型化の分析

○問題と目的: 蘭・高橋(2008)によると学級集団のタイプは、( )創発型、( )階層型、( )専制型、( )リーダーシップ型学級の4つに分類することができる。本研究では4つのタイプから典型例と思われる事例を1つずつ抽出して調査に用いた。

質問項目の作成: 4つのタイプに類型化するためには、タイプごとの学級集団の特徴を抽出する必要がある。調査に先立って現職教

員を対象に「教師・子どもの特徴、学級の雰囲気」という観点について自由記述による回答収集し、それを基に質問項目を作成した。したがって、調査で用いられたのは、1) 4つのタイプの典型事例、2) 教師の特徴に関する質問項目(20項目)、3) 子どもの特徴に関する質問項目(25項目)、4) 学級の雰囲気に関する質問項目(16項目)、であった。

○調査の手続き:

対象 国立大学の教育学部に在学中の大学生 227 名。

調査日及び手続き 2009 年 12 月。大学の授業時間内に、4つのタイプの事例をランダムに一人が1事例読むように割り当て、質問項目に回答するように指示し、その場で質問紙などは収集した。

○結果と考察 「教師の特徴」「子どもの特徴」「学級の雰囲気」のそれぞれについて、主因子法(プロマックス回転)を用いて分析した。因子数については、4タイプに分類する主軸として二軸想定し、因子数を2として検討した。因子分析後は、信頼性の検討のため因子ごとにクロンバックの係数を測定した。因子分析の結果、「教師の特徴」に関しては因子が二つに分かれたが、それ以外は分かれなかった。教師の特徴の第1因子は「教師は子どもの活動を見守っていた」などの項目からなり、「教師のサポート因子」と解釈された。第2因子は「教師は熱い指導で子どもたちと接した」などからなり、「教師のリーダーシップ因子」と命名した。

係数は「教師の特徴」の教師のサポート因子が  $=.94$ 、教師のリーダーシップ因子が  $=.87$ 、「子どもの特徴」  $=.96$ 、「学級の雰囲気」  $=.93$  であり信頼性は十分であると判断した。次に、「教師の特徴」に関して因子分析によって得られた2つの因子の尺度得点を関数として学級集団の4タイプを予測できるか、判別分析を行った。判別分析の結果は、下記の図1に示す。

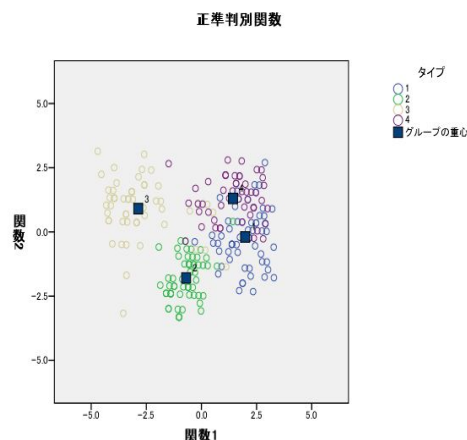


図 1: 正準判別関数を用いた判別分析

この結果、正準判別関数を用いたプロットはおおよそ4タイプに分類できた。この関数

を用いて元の事例に沿ったケースを分類すると、そのうちの 85%を正確に分類することができた。

本研究において、「教師の特徴」に関して、教師のサポート因子とリーダーシップ因子の2因子を明らかにすることができた。ここで得たプロットはこれまでの研究で明らかにしてきた学級集団の類型化と非常に近いものであった。特にここではリーダーシップ因子の得点に注目したい。教師のリーダーシップ得点が高ければ、これまでの類型化の分類の主軸である主導性（教師 - 生徒）でいうところの教師主導であり、低ければ生徒主導であると考えられる。また、要因観の相関を計算したところ、サポート因子は「子どもの特徴」( $r=.854$ )と「学級の雰囲気」( $r=.801$ )と高い相関を示した。このことは、もう一つの主軸である活動性次元との関係があることを示唆していると思われる。子どもの活動性に対するサポートが、学級集団をより活発にし、その活動性に大きく影響を与えていると考えられるからである。

判別分析の結果からはタイプ と の重なりがみてとれる。これは、教師のリーダーシップにより活性化した学級(タイプ )が、メンバー相互が影響を及ぼしあいながら創発型学級(タイプ )へと変容していく傾向があることと関連性があると思われる。創発型学級を持つ特徴である「自立した生徒」「自由で闊達な雰囲気」は、教師のリーダーシップにより相転移した学級からさらに成熟した集団となった可能性があること、そしてそれには教師の生徒の活動をサポートする姿勢が大きく関与していると示唆される。

教師の学級集団指導は、学級集団の類型化を把握することで適切に行えるようになる可能性は大きい。ところが、担任教師が希求する「創発型学級」づくりのための指導法については十分に検討されてはいない。今後は集団類型化の質問紙作成と同時に、実践的な指導法の開発にもアプローチを行っていく課題が残っている。

## (2) 構成概念の妥当性の検証

○問題と目的：これまで考えられてきた学級経営のあり方は、タイプ 型のリーダーシップ型の教師のありようが、ある種の一つの理想形として考えられてきた。しかし、生徒の主体性を重視する創発型学級を検討するときに、こうした教師のリーダーシップ型と創発型学級とは、同様に活動的な学級スタイルではあるものの、主導性によって分類されると考えられる。こうした構成概念を検証するために調査を実施した。

○方法：創発型学級についての構成概念を検討し事前調査を経て妥当性、信頼性を検討した25項目により質問紙を作成し、大学生119人を対象にされた。2012年12月に実施。

○結果及び考察：得られたデータを因子分析(バリマックス回転)結果が表1である。これによると、2因子を抽出できた。第1因子

は、「お互いを信頼しながら意欲的に活動していた」「生徒同士が協力して行動することが多い」などの項目から、『生徒主導型因子』と命名した。第2因子は「先生はいろいろなことを決めてくれる」「活動ごとのリーダーを先生が決めていた」などの項目から『教師主導型因子』と命名した。内部相関は第1因子が  $=0.975$ 、第2因子が  $=0.832$  と高い。抽出された2つの因子は、仮説を支持し、活動性においては類似性が高い「創発型」「教師リーダーシップ型」の2つのタイプにおいても、生徒の主導性を軸にして考えてみたときに、分類することが妥当である。従前の学級経験においては、教師の主導性が学級経営の基本的な管理に不可欠であると考えられてきたが、そうした考えから生徒自身の自主性自律性をベースにした創発型学級経営を行うことはこれからの学級経営を考える提案となる。

表1：因子分析の結果

質問項目	fac1	fac2	共通性
<b>第1因子 =0.975</b>			
13お互いを信頼しながら意欲的に活動していた	0.905	-0.182	0.853
9生徒同士が協力して行動することが多い	0.895	-0.246	0.862
7生徒は先生を信頼していた	0.880	-0.192	0.811
15生徒はみんな協力しながら活動しようとしていた	0.879	-0.216	0.820
8先生は生徒を信頼して、活動を任せていた	0.879	-0.277	0.849
3人間関係が自由でオープンだ	0.872	-0.261	0.828
2生徒の発言や行動が自由だ	0.849	-0.323	0.825
4友人たちの意見を参考にすることが多い	0.842	-0.160	0.734
19生徒の主体的活動を先生は応援していた	0.841	-0.250	0.770
1教師は生徒が活動しやすいように、効果的なアドバイスを行った	0.815	-0.059	0.668
16クラスのルールは生徒みんなで決めることが多かった	0.795	-0.150	0.654
20先生がいないでも安心して活動できる	0.779	-0.190	0.643
25クラスの活動目標は自分たちで決めることが多い	0.774	-0.148	0.621
14生徒はクラスの中の仕事をお互いに任せあっていた	0.750	0.031	0.564
12信頼ができるリーダーがクラスにいる	0.749	0.103	0.571
<b>第2因子 =0.832</b>			
23先生は色々なことを決めてくれる	-0.394	0.780	0.764
5活動ごとのリーダーを先生が決めていた	-0.398	0.715	0.670
6先生は積極的にイベントを仕組んだ	0.146	0.660	0.457
18先生がいる時といない時でクラスの雰囲気が大きく変わる	-0.384	0.646	0.564
11生徒は先生の反応を気にしている	-0.323	0.604	0.469
10生徒はすぐに先生の意見をきこうとする	0.177	0.515	0.297
21問題解決には先生の力が常に必要だ	-0.116	0.403	0.176
因子寄与	11.092	3.376	
因子寄与率	50.420	15.344	
累積因子寄与率	65.764		

## (3) 創発型学級づくりのプログラムの実施と評価

○問題と目的：創発型学級の実践事例からなる自己研修プログラムを作成し、その資料を基に研修を行う。その後創発型学級づくりの実践についての内省報告を基に評価する。

○方法：現職教員に対して、学級集団の像としての創発型学級概念について説明したあとに、創発型学級づくりについて研修し、その手法について記述したものを分析の対象とした。対象は関東地区の複数の都県の現職教員18名。創発型学級を体験したと内省報告した13名の事例を分析の対象とし、創発型学級づくりの実践手法を検討した。2013年8月、実施。

○結果及び考察：13事例はそれぞれいきいきとした実践が記述されていた(表2参照)が、その中には共通した傾向を見いだすことができる。まず一つは、教師の役割に対する従



来の方法との相違である。これまでは、教師の役割に対する従来の方法との相違である。これまでは、教師のリーダーシップで「指導する」ということにウエイトを置いた指導を行ってきた担任が、「生徒に役割を任せ」（事例3,5,6,10,13）という方針に転換したことが教師役割の大きな変更であると考えることができたと考えられる。生徒に任せるとは、じつは安全や管理上大きな抵抗があるものだが、それを乗り越えて生徒に託しているのである。

二つ目に、それまでのその生徒に対して多くの生徒がもっていた固有のイメージを変えている点が挙げられる。それまでとは違った役割を付与する（事例1,2,4）ことで、こう着した学級集団内の人間関係に揺らぎを起し、変容させている。それまでと違った側面を発揮することで生徒個人はもちろん、それを取り巻く周囲の生徒に対する認識を変容させることに成功している。個人と集団が相互に影響を及ぼし合い、新たな関係性を再構築することに成功している。

三つ目としては、教師が支援する側に回りながら多くの生徒とともに活動を認め合っている（事例1,5,6,7,13）。活動の成果を教師と生徒が味わい、努力や成果を認め合うことで、学級集団は自信や信頼を経験する。そのことは、その活動の承認であると同時に次の活動への意欲や動機づけのエネルギーとなる。こうしたことから、創発型学級づくりは、通底するシステムや像を持っており、従来型の学級集団指導に加えて、生徒の自主的自立的な成長を促す一つのスタイルであることが提案できる。

表 2：創発学級づくりの実践手法（抄録）

1	N男とK子という二人の問題を抱えた生徒に、騎馬戦の大将騎、合唱祭の実行委員という役割を付与した。
2	班長を特定の子だけではなく全員にやらせるようにした。クラスの雰囲気が悪くなったときに、学級委員に任せて学級会を開いた。
3	掃除がうまく回らなくなったときに、生徒たち自身で「任せて欲しい」ということを言い出したので、担任はまかせたところ、自分たちでアイデアを出し合い工夫しながら清掃活動を行った。
4	合唱コンクールの指揮者を初めてやる生徒がいて悩んでいたが、「あなたなら大丈夫」と応援していたら、生徒たちも協力するようになっていった。
5	教師が口出してしまえば簡単だが、生徒たち自身に係り活動の内容を考えさせて行かせた。その結果、他人任せにせずに自分たちで考えて活動するようになった。
6	お楽しみ係の企画する誕生会をすべて生徒に任せた。するとリーダーを中心にサポートをする子が出てきた。見守る姿勢を教師は大切にされた。
7	自分たちから進んで給食準備を行うことができるようになって、全員をほめた。
8	移動教室があったときに、問題を抱えた子の対応を含め、子どもたちとともに考えた。それ以来自分たちでいろいろ考えるようになった。
9	本気でやるうとしている子にサポートするようにしている。
10	遊び係の仕事を自分たちでやりたいと言ってきたので任せたら、係の活動にみんなも協力した。学級のレクは成功した。
11	授業を進める役を生徒に振ったら、一人一人の生徒が自主的に学習するようになった。
12	クラスの雰囲気を壊すような生徒に対して、生徒たちの中から真剣に注意をし始める者が現れ、次第にクラスがまとまっていった。
13	農山村留学の出し物を話し合っていて「私たちに任せて」という生徒に任せた。担任は準備を手伝うだけだったが真剣に取り組み大成功だった。

この3つの実践上のポイントを概念化すると、図2のように整理することができる。

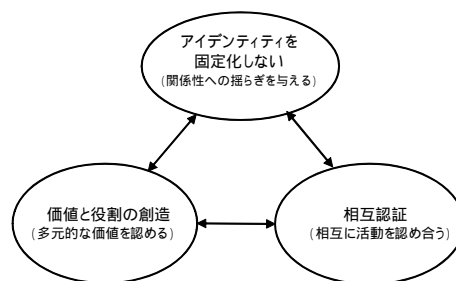


図 2：創発学級づくりの実践のためのポイント

**アイデンティティを固定化しない** ある個人が、一つの行動様式をとることで、その後の行動や態度が類推されたり因果関係が推定されたりすることは決して少なくはない。人間の行動を理解し解釈するときの因果関係の類推には、教師の経験や知識に基づいた判断は必要である。そうした知見に依拠した対応がなされる必要がある。しかし、それを絶対化し固定化することは、教師の主観性や学校のロジックを生徒に強いることにつながりかねないという危険性ははらんでいるということを考慮していかなければならない。

**価値と役割の創造** 生徒の多面的な価値を認めることなく、過度の強制があっては自主性や自立性への意欲がそがれてしまうことは当然である。一つの面で十分な効果を上げることができなくても、違う面で能力を発揮することは十分に考えられることであり、その可能性を探り、能力を引き出す場が教室である。多面的な価値の存在を銘記したうえで多くの生徒に役割を付与し、個人が持つ多様な能力を価値づけていくことは、創発学級にとって不可欠である。

**相互認証** 生徒が活動によって自己有用感や効力感を味わうことは、個人にとっても集団にとっても好ましい。それは活動の成果が表れたかどうかということとは影響を受けるものではない。活動を経験し、自己の役割を担えたことを体験したことに意味があるのだ。それは個人の内的な喜びであるが、さらに周囲の人々から認められることで、体験の価値はさらに高まるであろう。そうした体験は、役割を果たした自分を定位し、次の活動の参照点となる。どのように自分が振舞ったのか、それはどういう効果をもたらしたのか、を確認できる地点となる。周囲とのかかわりにより共同体の一員としての充実感や活動以前の自分からの解放を達成したことを振り返る、新しい自己を立ち上げる契機とすることができるのである。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計4件)

蘭千壽・高橋知己，創発型学級における信頼研究，千葉大学教育学部研究紀要第 62 巻，査読無、2014.03，231-238

蘭千壽・杉本成昭，自己組織性理論と学級経営，千葉大学教育学部研究紀要第 62 巻，査読無、2014.03，221-229

蘭千壽・高橋知己，創発学級の育て方 - 実践に向けての提言に変えて - ，千葉大学教育学部研究紀要第 61 巻，査読無、2013.03，319-325

蘭千壽・高橋知己，学級集団指導における公正さの意義 - アマルティア・センのケイパビリティ (capability) から俯瞰する - ，千葉大学教育学部研究紀要第 61 巻，査読無、2013.03，313-318

〔学会発表〕(計 2 件)

蘭千壽・高橋知己・樽木靖夫・越良子，創発学級づくりという学級経営のあり方，日本学校心理士会 2013 年度大会プログラム・発表論文集 (九州産業大学)，2013.08.12 pp.72-73

蘭千壽・高橋知己，学級集団類型の分析のための質問紙開発の試み，日本学校心理士会 2012 年度大会プログラム・発表論文集 (中部大学)，2012.08.20 pp.72-73 6 .

#### 研究組織

##### (1)研究代表者

蘭 千壽 (ARARAGI CHITOSHI)

千葉大学・教育学部・教授

研究者番号 90127960

##### (2)連携研究者

越 良子 (KOSHI RYOKO)

上越教育大学・学校教育学部・教授

研究者番号 60215233

樽木 靖夫 (TARUKI YASUO)

帝京科学大学・教職センター・教授

研究者番号 60590156

高橋 知己 (TAKAHASHI TOMOMI)

上越教育大学・学校教育学部・准教授

研究者番号 50733383